



TITLE:

緑星曆

AUTHOR(S):

奥村, 正太郎

CITATION:

奥村, 正太郎. 緑星曆. 天界 1932, 13(141): 15-16

ISSUE DATE:

1932-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162303>

RIGHT:

緑 星 暦

奥 村 正 太 郎

古代のエジプト人は優秀なる文明の所有者でありました。彼等はエジプト王朝時代に遡ること一千年の昔、紀元前四千五百二十一年のころ、既に太陽暦に劣らぬ「緑星暦」を用ひてゐたのであります。緑星暦は、水平線上に「緑星」が見えた時を年の始めとしたものでありまして、三十日よりなる一ヶ月十二個と、五日の剩餘日とを加へた、三百六十五日を以て、一年とし、四ヶ年ごとに一日の閏日を設け、一千四百六十年を以て一週期としたものであります。水平線上にシリウス星の現れるのは今の七月に當り、これよりナイル河は氾濫季に入るのであります。

“水平線上に 緑星見ゆと 鐘打ちし サワラの主の 眠る金字塔”

第十二王朝時代までのエジプト王は、ピラミッドの建設を以て畢生の大事業として、その中に自分の命をきざみ込んだものであります。かくて大小幾十のピラミッドは延長百キロメートルにわたる沙漠の原に點々として立並び、天下の偉觀を現出したのであります。が、數あるピラミッドの中にも巍然として群を抜き、雄大なる英姿を誇るものは、天才ケオプス大王の建設せるギザの大金字塔であらねばなりません。

此時代におけるエジプトの科學は想像以外に進歩してゐました。殊に數字の發達は實に大したものであつたやうです。そして學者の間には既に地動説が理解されてゐたのみならず、天體の地位距離の如き、高等數學に屬するものさへ驚くべき正確さを以て觀測されてゐたやうであります。此の絢爛たる文化の様を有りのまゝに物語るものは、バビルスに書かれた象形文字ではなく、不思議なるギザの大金字塔であります。

或學者の計算によりますと、エジプト人が當時使用してゐた尺度の單位は、地球の兩極を貫く軸の千萬分の一に當り、此單位を二十五倍すると一年の日數365,24を得、又金字塔の高さを十億倍すると地球と太陽との距離148,208,000キロメートルとなるといふことです。

此偉大なるギザ金字塔の建てられたのは、今を去ること實に五千年の大昔であります。當時、我が地球の北極は Draco 星座のアルファ星即ち Thuban 星を指してゐたのですが、大金字塔の底邊は、正しく、此トウバン星を指してゐるのであります。

その後三千年の時は移り、ホーマの時代が來ました。そして我が地球は今の北極星を眞北に戴くやうになつたのであります。その時から尙二千年を経て、再び科學高唱の現代が廻つて來ました。けれども、大金字塔は昔の姿のまゝ冷やかに沈黙を守つてゐます。

今後更に一萬二千年の時がたつと、地球の北極は西下に傾いて鮮やかな曙光が輝く、Lyra 星座を指すことゝなるやうですが、その時が來ても、大金字塔の姿は恐らく一萬八千年の昔と變りはありませんまい。

只此の變りなき常住の姿の中に、獨り力強く生きてゐるのは、輝ける科學の命であります。科學を驅使した古代エジプト人の正智の眼であります。

“トウバンの 眞北を指せし そのかみの 姿を守る 金字塔あはれ”

一「インチ」の長さは

英國の物理學者が近頃測定した所によると、 1 「吋」の長さは

25.399956 ミリメートル

であるといふ。ところが、米國では、

25.40005 ミリメートル

といふ値が公けに採用されてゐる。同じ 1 「吋」を、こんな風に、僅かながら違ふ標準で用ゐてゐるのは誠に不合理なので、近頃、英米共に

1 「吋」 = 25.400000 ミリ

といふ新しい規定にしようといふ運動が兩國で起つてゐる由。